

ウィーバー (Weaver, R.M.)の作文教科書 『Composition』(1957)の国語教育論的 意義について

— トポスによる議論文指導の試み —

香 西 秀 信

0

この標題の意味について説明するには、少しアメリカの国語教育の歴史を振り返ってみる必要がある。コーベット (Corbett, Edward P. J.) の論文『レトリックと国語教師』(Rhetoric and Teachers of English¹⁾) にはそのあたりの事情が手際よくまとめられているので、彼の説明に依りながら、この問題をみていくことにしよう。

コーベットによれば、アメリカの国語教師の間には、いくつかの歴史的な“流行”(vogues)があったという。

第一に、1930年代の終りから1940年代全般にかけての一般意味論 (General Semantics) への関心である。この流派は、ポーランド生まれの論理学者コージブスキー (Kozybski, Alfred) を生みの親とするものであるが、これを一般に広め国語教室に導入したのは、ハヤカワ (Hayakawa, S. I.), リー (Lee, Irving J.), ジョンソン (Johnson, Wendel), チェイス (Chase, Stuart) 等の人物であった。第二次世界大戦の頃になると、大学にもこの分野の専門家が数多く席を置くようになり、コミュニケーションの講座がその真価を認められるようになった。この流行は1948年頃ピークに達し、その時には全国200以上の大学でコミュニケーションの講座が開講されていたという。1949年に設立された、主にフレッシュマンイングリッシュ (Freshman English) の問題を取り扱う団体である Conference on College Composition and Communication (CCCC) の団体名にも、この流行の影響が反映している。

第二の流行は1950年代の大方を通じてのもので、ブルームフィールド (Bloomfield, Leonard) の著書『言語』(Language, 1933) によって基礎づけられた構造言語学である。この流派は、その後、多くの学者によって体系化の努力がなされ、スレッド (Sledd, James), ロバーツ (Roberts, Paul), ロイド (Lloyd, Donald J.), ワーフェル (Warfel, Harry A.) 等の教師によって、国語教育への応用が試みられた。

これら二つの流行と共に、1940年代以降しだいに盛んになり、1960年代に入って熱狂的に国語教師の関心を集めることになったのがレトリックである。この流行の背景を、コーベットの論文を補いながら二つほど指摘しておこう。

第一に、19世紀の後半以来ほとんど消滅寸前の危機にあったレトリックが、リチャーズ (Richards, I. A.) の『レトリックの原理』(Philosophy of Rhetoric, 1936) の出版によって、再び注目を

集めるようになったという事情である。この書物は、レトリックを「誤解とその防止の研究」²⁾という全く新しい面から捉え直したものであるが、これ以降、アメリカの批評界を中心に「ニューレトリック」探究の試みが広がっていった。

第二に、以前から大学のフレッシュマンイングリッシュの時間が、十分にその役目を果たしていないということが指摘されていた。これは、フレッシュマンイングリッシュが主に作文の時間であるにもかかわらず、大学の国語教師のほとんどが文学科や言語学科の出身で、作文指導の訓練を受けていないことが大きな理由の一つであった。この不振を取り戻すために、第一で述べた「復興したレトリック」が、まるで「万能薬 (panacea) のように」³⁾ 熱狂的に取り扱われるようになった。

しかし、実際問題として、国語教師が「ニューレトリック」から受けた恩恵は、一体どの程度のものであるのか。確かに、リチャーズの『レトリックの原理』以来、「ニューレトリック」と題した、あるいはそれをテーマにした数多くの書物が出版された。だが、それらはいずれも提言、シンポジウムの記録、試み等であって、古典修辞学に匹敵するような新修辞学の体系を構築したものは、ほとんどといってよいほどみられない。(唯一とも思える例外は、ブリッセル大学のペレルマン (Perelman, Chaïm) の新修辞学 (La nouvelle rhétorique) であるが、彼の場合は文彩 (figure) や比喻 (trope) の研究に終始したフランス語圏の古典修辞学の主流派に対する反発から、新修辞学を名のっているものであって、詩学 (poétique) と接近しすぎたレトリックをもう一度弁証術 (dialectique) と結びつけ、議論と説得をその目的とする彼の修辞学は、むしろ本来的な意味での古典修辞学というべきものである。)⁴⁾

もともと「ニューレトリック」とは、例えば「ニュークリティシズム」のように、そのような名称の流派があるのではなく、ただ単に古典修辞学に対して新修辞学を名のっているだけの様々な立場・分野の人間の修辞理論を漠然と包括した呼び名にすぎないものであった。そのせいかどうか、なかにはただブームに乗ることだけをねらった、明らかに際物としか思えないような学説も存在する。このような事情は、特に純粋理論の分野に限らず、作文教授書に应用された場合も似たようなものであって、レトリック復興以来、標題に「ニューレトリック」や「レトリック」を謳った多数の作文教授書が出版されたが、それらのなかには、内容はレトリックと何の関係もない凡庸な作文教科書に過ぎないものが数多くあって、目録を見て本を買う他のない異国の研究者を嘆かせている。

「ニューレトリック」が、このように、それほど国語教育 (作文教育) に貢献していない (と私は見ている) のに対して、むしろ着々と成果をあげているのは、全く新しい修辞学でなく、古典修辞学を現代風に捉え直して作文教育に役立てようとする試みである。やはり、古典修辞学の二千年の歴史と伝統は、それほどたやすく取って替わるものではないのであろう。このような傾向を持ったフレッシュマンイングリッシュの作文教科書には、次のようなものがある。ウィーバー (Weaver, Richard M.), 『コンポジション』 (Composition, 1957), デュアメルとヒューズ (Duhamel, P. Albert and Hughes, Richard F.) 『レトリック：原理と使い方』 (Rhetoric: Principle and Usage, 1962), ウインタロード (Winterowd, W. Ross) 『レトリックと作文』

(Rhetoric and Writing, 1965), コーベット(前出)『現代学生のための古典修辞法』(Classical Rhetoric for the Modern Student, 1965)。

この中でも、特にウィーバーの本は、著者が高名なレトリックの理論家であるということとは別に、その画期的な試みによって、その後の作文教科書に大きな影響を与え、古典修辞学の価値を再認識させるきっかけともなった。それは、この本がフレッシュマンイングリッシュの教科書としては初めて議論文の指導にトポス (topos) を導入したからである。⁵⁾

トポスとは、後で詳しく説明するが、古典修辞学が体系化した議論のための補助手段を意味するギリシャ語であって(複数形は topoi), 現代にも topic という語で伝わっている。(ウィーバーの本は、用語は topic を用いている。ちなみにトポスに関する研究・学問をトピカ < topica > いう。)

本論文は、このウィーバーの『コンポジション』で扱われたトポスを、分析・検討して、議論文指導におけるその意義を明らかにしようとするものである。しかし、本論に入る前に何故このようなテーマを選んだかということについて、その意図を説明しておこう。

第一に、我国の国語教育(作文教育)では、児童の生活文の指導は優れていて、みるべきものもっているが、上級の学生の議論文のような自分の考えを論理的に効果的に組み立てていく文章の指導は、比較的立ち遅れているということが、以前から指摘されている。不振の理由としては、色々な要素が考えられようが、なかでも特に二つの重要な点を指摘しておきたい。

(a) 我国には、弁論術の伝統がないため、議論法というものが殆んど育たず、逆に、そうしたものを嫌悪する言語習慣が形成されている。

(b) 日本の国語教育は、伝統的に児童を主たる対象にしており、議論文の指導のような上級の学生を対象としたものは、理論・実践の層が薄い。

もし、原因がこのような我国の伝統的事情に基づくものであるならば、比較国語教育的見地から問題の改善策を考えていくことも必要になる。

第二に、今挙げた理由からみれば、ウィーバーの『コンポジション』を検討することは、次の点で有益である。

(a) この教科書は、西洋の二千年余の伝統をもつ修辞学を応用したもので、なかでもトポスという古典修辞学が体系化した議論法の補助手段を採り挙げている。

(b) ウィーバーが、この教科書にトポスを採用したのは、単なる思いつきや奇を衒ったものではなく、シカゴ大学での彼の実践経験に基づくものである。彼は、既に1953年にシカゴ大学のフレッシュマンイングリッシュの同僚と共に、トポスによる議論文指導の実践結果の報告を提出しており、⁶⁾これはフレッシュマンイングリッシュでの古典修辞学の有益性を示唆した最初の論文であろうといわれている。⁷⁾

このように、本論文の目的は、ウィーバーが議論文の指導に初めてトポスを採りあげた意義とその取り扱い方を検討するところにあるが、その研究意図はあくまでもそうすることによって、我国の国語教育に何か有益な示唆を与えてくれるのではないかという期待によるものである。

最後に、本論文の構成について簡単に説明しておこう。

第一章 — まずトポスについて、その意味を歴史的に考察する。トポスは、修辞学の発展と共に、古代・中世・ルネサンスとそれぞれ独自の展開をみせているのであるが、ここではウィーバーが参考にした古代のアリストテレス流のトポスについて述べる。

第二章 — 『コンポジション』のトポスを分析する前に、予備作業として、ウィーバーのレトリック観、トポス観について簡単に説明し、その後で『コンポジション』のトポスの具体的な検討に移って、議論文指導におけるその意義を明らかにする。

1

トポスを初めて学問的に論じたのは、アリストテレス (Aristoteles) である。彼には、『トピカ』(Topica, 推定 B. C. 4 C の中頃) というトポスを専門に研究した著作があるが、それは弁証術の方法として述べられているものであって、本論文の主題とはそれほど関係がない。ここでは、『トピカ』の約20年後に書かれた『弁論術』(Rhetorica) にあらわれるトポスの分析から入りたいと思う。『弁論術』のトポスについて知るには、まずエンテュメーマ (enthymema) という弁論術特有の用語の説明から始めなければならない。

エンテュメーマは、時代の推移に応じて、色々な意味を与えられたが、主なものは次の二つである。

①アリストテレス (およびその流派) にとって、エンテュメーマとは、多くの場合に「蓋然的な前提やしるし」に基づく推論 (三段論法) を意味する。論理的推論 (科学的三段論法) は、必然的な (確実な) 前提から出発し、必然的な結論に到達するものであるが、「蓋然的なもの」(そうらしいもの) から出発するエンテュメーマは、結論においても蓋然的な確実性しかもたない。この二つを例を挙げて説明してみよう。論理的推論の場合は、ロラン・バルト (Barthes, Roland) が皮肉っているように、「それは、奇妙にも、我々が死ぬことを繰り返して言うのである」⁸⁾ 人間が死ぬという例が使われることが多く、しかもその小前提は大抵ソクラテスが主語になる。曰く、

人間は死すべきものである。(大前提)

ソクラテスは人間である。(小前提)

故にソクラテスは死すべきものである。(結論)

今度は、やはりソクラテスを使って、エンテュメーマの例を挙げてみよう。

善い人間は盗みを働かない。(大前提)

ソクラテスは善い人間である。(小前提)

故にソクラテスは盗みを働かない。(結論)

日常的議論、すなわち弁論術の領域では、エンテュメーマの方がより一般に使われる。「弁論術的推論の前提が、必然的なものであることは稀である。なぜなら、我々が判断したり審議したりするものの多くは、違ったあり方でもありうるからである。我々が熟慮したり審議したりするのは人間の行為についてであるが、人間の行為はすべて上のような性格をもっており、一般的に言って、必然的なものは何もないからである。」⁹⁾

エンテュメーマは、しばしばその前提や結論を省略することがある。(例：ソクラテスは善い人間であるから盗みを働かない。)[(エンテュメーマは)少数の前提から、そしてしばしば正式の三段論法よりも少ない前提から推論される。]¹⁰⁾なぜなら、前提が一般的に認められている場合には、それを省略してもさしつかえないし、一々言えば、かえって推論がわかりにくくなることがあるからである。「エンテュメーマの結論は、あまりに遠いところから導いてもいけないし、また推論のすべての段階を踏んできてもいけない。(なぜなら)前者は、その遠さのために不明瞭になるし、後者はわかり切ったことをくどく述べるために、言葉の無駄が生じるからである。」¹¹⁾

②エンテュメーマの第二の意味は、ローマの哲学者ボエティウス(Boetius)が普及させたもので、中世以降これが一般となるのであるが、前提の内容(必然的か蓋然的か)に関係なく、省略された推論(三段論法)をさすものである。先の例を使えば、「ソクラテスは人間であるから、死すべきものである。」「人間は死すべきものであるから、ソクラテスは死すべきものである。」のような推論である。省略する部分は、それが自明のものであれば、大前提でも、小前提でも、結論でもかまわない。したがって、蓋然的なものに基づいていても省略されない推論は、エンテュメーマとはいわれなくなり、エピキレーマ(epichirema)という新しい言葉で呼ばれるようになった。¹²⁾

弁論術の領域で、最も一般的に使われ、かつ有効な説得の手段は、今挙げたエンテュメーマであるが、それを構成するための要素であり、その前提となる基本的命題がトポスである。トポスというギリシャ語の本来の意味は「場所」であるが、これが弁論術の用語として使われると、「有効な論証(エンテュメーマ)を探し出す場所」を意味する。つまり、トポスとは種々の日常的議論の要素や型を法則化し、類型化しておいて議論を進める際の手掛りとなるように工夫された項目のことである。

アリストテレスは、『弁論術』のなかで、三種類のトポスについて論じている(というより、トポスという言葉を三通りに用いているので)、それらを順を追って説明してみよう。

第一は、それぞれの議論(弁論)の領域に特有の命題であって、アリストテレスは、このトポスを種(エイダス)という言葉で呼んでいる。これは、例えば法廷での議論でいえば、「証拠」、「動機」、「故意・過失」等に関する命題であって、弁論者が議論を進める際にどうしても心得ておかなければならないものである。このトポスは、それぞれの領域に特殊なものであるので「特殊のトポス」とも呼ばれる。¹³⁾

第二は、特殊な領域に固有のものではなく、様々な領域の弁論に共通して適用することのできる命題である。アリストテレスは、これを「共通のトポス」と呼び、四種類を挙げている。

(a)「可能・不可能」あることが可能かどうかを表す命題。例：「もし人間が、病気から癒えることが可能なら、病気になることもまた可能である。」(反対なものにも同様に可能性があるから。)

(b)「あったか、なかったか」あることが起ったかどうかを表す命題。例：「もし、ある男が、ある事を忘れたならば、彼はかつてそれを学んだことがあったのである。」(あることの後で起ることが起ったならば、そのこともあったに違いないから。)

(c)「ありそうか、なさそうか」(b)で述べたトポスの未来のことへの適用。例：「もし、空が雲

で覆われたなら、おそらく雨が降るのであろう。(本来あるものに先行するものが生じたならば、そのこともありそうだから。)

(d)「より大きい、より小さい」あるものが他のものより大きい(あるいは小さい)ことを表す命題。例:「自分の父を殴るような人間なら、隣人だって殴るであろう。」(あることをなすなら、それよりも、より多く起ることもなすであろうから。)

これらの命題は、すべての種類の弁論に共通に適用できるものである。¹⁴⁾

第三は、アリストテレスが「エンテュメーマのトポス」と呼んでいるもので、前の二つがエンテュメーマの材料となる命題を構成するものであるのに対して、これはエンテュメーマを組み立てる型式を意呼する。アリストテレスは、第二巻第23章で、28種類のトポスを挙げている。その一部を列挙してみよう。

1 「反対から」(例:節制は良いことである。何故なら、放縦は有害であるから。)

2 「同様の派生語から」(「正しいこと」は必ずしも「善いこと」ではない。何故なら「正しく死刑になることは、望ましいことではないからである。)

3 「相対的なものから」(「それを売ることが、諸君にとって醜いことでないなら、それを買うことは、我々にとっても醜いことではない。)

4 「より多くとより少なくから」(自分の父を殴るような人間なら、隣人だって殴るだろう。)

5 「時をみることから」(何か期待できるときは約束をし、それを受取ったら約束を破るようなまねをしてはならない。)

6 「自分を非難して言ったことを、言った相手に言いかえすことから」(君が裏切らないのに、僕が裏切るだろうか。)この論文を用いるときは、不正なことをしそうなのは相手の方だと、前もって思わせておくこと。

7 「定義から」(精霊とは何か。もしそれが神の創ったものであるとするなら、神の存在も認めなければならない。)

8 「言葉の多義から」例なし。

9 「分割から」(人が不正を行う場合が三つある。そのうち、前の二つは不可能であるが、告訴者は第三の場合でもないという。したがって、被告は不正を行っていない。)

10 「帰納から」(他人の馬を見ることの下手な人間には、自分の馬をまかせることはできない。)

11 「同一のもの、同様のもの、あるいは反対なものについての権威者の判定から」(彼女は、テセウスがそう判定した以上は、優れた女である。)

12 「全体の部分から」(どのような神殿に対して、彼は不敬なことをしたのか。国の祭る神々のうちで、誰を、彼は尊敬しなかったことがあるのか。)

13 「それによって起る良い、または悪い結果から」(教育は受けなければならない。何故なら、賢い者でなければならないから。)

14 「対立するものに関して、勧めるか、諫めるかしなければならない場合に、13の論法を両方の場合に使用することから」(弁論家になってはいけない。何故なら、正しいことを言え、人々はあなたを憎むだろう。正しくないことを言えば、神々があなたを憎むだろう。—これに対して—

弁論家になりなさい。何故なら、正しいことを言えば、神々はあなたを愛するでしょう。正しくないことを言えば、人々があなたを愛するでしょう。)

〈中略〉

27「過失に対して、告訴したり、弁明したりすることから」法廷での特殊なトポスである。

28「名前（の意味）から」（立法家のドラコンの法律は、人間のものではなくて、ドラコン（竜）のものだ。（残酷なものであったので））

一見してわかるように、様々な論法の型が未整理のまま雑然と並べられているが、問題は、このエンテュメーマのトポスが、前の二つのトポスに対して、一体どういう関係にあるかということである。普通には、トポスには三種類あって、前の二つはエンテュメーマを構成する材料となるものであり、エンテュメーマのトポスは、エンテュメーマを組み立てる型式であると、三者並立的に解釈されているようであるが、種々の弁論に共通に適用できるという点からみれば、エンテュメーマのトポスは、共通のトポスの一種であるとも考えることもできる。実際に、先に述べた共通のトポスの(d)と、エンテュメーマのトポスの四番目のように、同じものが重複して記述されている例もある。ともかく、第二巻第23章のエンテュメーマのトポスのリストは、あまりにも配列がでたらめで、方法が未熟であり、かつ雑然としていて『弁論術』の構成からみて、また他の部分と比較して、少なからぬ違和感をおぼえる。古典文献学者のケネディ（Kennedy, George）によれば、アリストテレスの『弁論術』は、他の多くの著作と同様に発展的な著作（developing work）であって、いくつか首尾一貫しない部分が見られるが、その一つに、アリストテレスがトポスという言葉で、節によって異なったものを意味させていること、特に、エンテュメーマのトポスと他のトポスとの関係を明確に示すことに失敗していることが挙げられるという。¹⁵⁾ この三種のトポスの関係は、泰西の研究者にとってもなかなか理解しにくいものらしく、私が見た若干の研究書でも、その解釈は様々である。試みに、そのうちのいくつかを挙げてみよう。

まず、ケネディは、エンテュメーマのトポスの配列の未熟さから、これを、アリストテレスの修辞学に関する初期の著作の残存物（remains）であると判断し、おそらく、アリストテレスの弟子の誰かが、『弁論術』のなかに組み込んだのであろうと推測している。¹⁶⁾ ランハム（Lanham, Richard A）の『修辞学用語小辞典』（A Handlist of Rhetorical Terms）では、トポスはエンテュメーマの材料という意味と型式という意味の両方で使われるが、アリストテレスも、彼に続く理論家も、どちらの面に彼らの関心があるのかをはっきりさせていないと述べた後、第二巻第23章のエンテュメーマのトポスを、伝統的なトポスであるとして、アリストテレスが、それを特殊のトポスと共通のトポスとに分類したと解釈している。河野與一氏の覚え書から推測するところでは、フォルクマン（Volkman, Richard）の『ギリシャローマ弁論術概説』（Die Rhetorik der Griechen und Römer in systematischer Vebersicht, 1885）も同様の解釈を採っているように見える。¹⁸⁾ コーベットは、『現代学生のための古典修辞法』（前出）において、アリストテレスは二種類のトポスを区別したと論じ、先に挙げた特殊のトポスと共通のトポスについて説明している。¹⁹⁾ ところが、後になってコーベット自身が議論文指導の手段として整理し直した共通のトポスのリストを見てみると、それは明らかにエンテュメーマのトポスの応用であ

3

る。²⁰⁾

このように、一流の研究者の書いた権威ありといわれている著作でも、これだけ意見が食い違う。この他にも、ロラン・バルト²¹⁾、クルティウス (Curtius, E. R.)²²⁾等いくつかの研究書にあたって見たが、明快な説明は得られなかった。トポスという言葉の複雑さがわかるであろう。

このような複雑さに、さらに輪をかけるのが、「共通のトポス」(Koinoi topoi)から派生した commonplace という言葉である。これは、仏語では lieux communs, 独語では Gemeinplätze という形で現代語に入っており、いずれも「常套句」「陳腐な表現」というほどの意味である。これをさらに検討してみると、大体次の二通りの意味に分けることができる。

第一は、「光陰矢のごとし」(time flies)「死は万人に訪れる」(death is common to all) のような、演説に組み込まれる格言的な常套句である。

第二は、「瞑想的生活対活動的生活」(contemplative vs. active life)、「短くてすばらしい人生が良いか、長くてつまらない人生が良いか」(a short, celebrated life vs. a long, obscure one) のように、いつの時代にも論議される一般の論題、陳腐なテーマをさす。²³⁾

ところが、本来の「共通のトポス」も英訳すると commonplace となるため、commonplace という言葉は、全く内容の異なった二つのものを包括する、曖昧でわかりにくいものとなっている。

このように、トポスという言葉は、きわめて多義で、その意味するものは必ずしも明確ではない。ただ、それが、説得を目的とした日常的議論、弁論術の領域で使われる以上は、その主流となるのは、やはりエンテュメーマのトポス、すなわち論法の型式であることは、容易に理解できるであろう。勿論、トポスは、それがどのような意味で用いられるにせよ、ケネス・パーク (Burke, Kenneth) が述べているように、「説得の原理から生み出されたもので、人々が一般に説得力があると思うものの見方か、あるいは説得的効果を持つ方法」²⁴⁾という性格をもつものであるが。

アリストテレスのトポス論について一通り見終ったので、今度は、それをさらに発展させ、整理したものとして、キケロ (Cicero) のトポス論を検討してみることにしよう。

キケロが、論法の型としてのトポス、すなわちアリストテレス流のエンテュメーマのトポスを論じた箇所は、『雄弁家論』²⁵⁾(De Oratore, 54 B.C.) や『弁論の分割について』²⁶⁾(De Partitione Oratoria, 約 52 B.C.) などにも見られるが、ここでは、より整理され、体系化されたものとして、『トピカ』(Topica, 44 B.C.) のトポス論を取りあげてみたい。

『トピカ』は、ある意味では不思議な書物である。キケロは、序文で、この本は友人のトレバティウスの求めに応じて書かれたアリストテレスの『トピカ』の翻案であると述べているが、²⁷⁾ 実際は両者は本質的に全くの別物であって、キケロの本で論じられているトポスは、むしろ『弁論術』第二巻第23章にあらわれるエンテュメーマのトポスである。どの研究書もこの事実を不思議がっているが、そうなった理由について推量することはしていない。キケロは、この本を記憶を頼りに書いたために、何か勘違いをしたのだろうか。それとも彼の見たアリストテレスの著作は、現在我々が見ているものとは違ったかたちのものであったのだろうか。……この問題はさておき、『トピカ』の具体的な検討に入りたい。

キケロは、第二章の冒頭で、トポスの研究を等閑にする当時の風潮に対して不満の声を漏らしている。

あらゆる体系的な議論の取り扱い、二つの部門をもっている。ひとつは議論の発見に関するものであり、他のひとつは、その妥当性の判断に関するものである。私が見るところでは、アリストテレスがこの両方の部門の創設者であった。(ところが)ストア派の連中は、それら二つの分野の、ただ一方だけを研究している。すなわち、彼等が弁証術と呼ぶ学問によって、判断の方法には勤勉にたずさわっているが、一方では、トピカと呼ばれる技術一より有益であり、ものの順序からいって当然先に来るべきものを完全に無視しているのである。²⁸⁾

このような風潮に対抗して、キケロはトポスの研究にとりかかるのであるが、彼はまずトポスを定義することから始めている。すなわち、トポスとは「議論の(在る)場所」であり、「議論」とは「疑わしい事柄を確信させる一続きの論証」であるという。²⁹⁾ キケロは、この定義に則って、自己流に17種のトポスを整理している。そのリストをここに挙げてみよう。(Hubbellの英訳も併せ挙げる。)

A 論議している問題に固有 (inherent) なトポス

- 1 定義 (definition)
- 2 部分の列挙 (enumeration of parts)
- 3 語源および語の意味 (etymology or the meaning of words)
- 4 論議している問題にきわめて関係のある事情 (circumstances) からの議論
 - 4-1 語形変化に基づく (based on conjugation)
 - 4-2 類から (from genus)
 - 4-3 類の種から (from the species of genus)
 - 4-4 類似に基づく (based on similarity or analogy)
 - 4-5 差異に基づく (based on difference)
 - 4-6 反対から (from contrary)
 - 4-7 当然の結果から (from adjuncts or corollaries)
 - 4-8 先件から (from antecedents)
 - 4-9 後件から (from consequents)
 - 4-10 矛盾から (from contradictions)
 - 4-11 原因から (from cause)
 - 4-12 結果から (from effect)
 - 4-13 比較から (from comparison)

B 外からの (extrinsic) トポス

- 5 権威に基づく (based on authority)

これらのトポスは、大体において、アリストテレスのエンテュメーマのトポスのリストに見られるものである。だが、アリストテレスのトポス論に比べて、キケロのそれは、配列や方法にお

いて、はるかに洗練されたものであることは、容易に見てとることができるであろう。このようなリストを弁論家はどうか使えばよいのか。キケロは、この点について『弁論の分割について』のなかで簡潔にまとめている。(この本はキケロ父子の対話篇である。)

キケロ子—それでは、私達は、お父さんが述べたすべてのトポスから議論を導き出すべきなのですか。

キケロ父—まあ、我々は、すべてのトポスを検討して、そのすべてから議論を引き出してみようとするべきだろう。だが、その際に、判断力を働かせて(当面の問題に関して)ほとんど価値のないものは常に取り除くべきだし、時には、あまり一般的すぎて個々の場合にそれほど密着してないものも無視すべきだろうね。³⁰⁾

同様に、キケロは『弁論家』(Orator, 46 B.C.)のなかでも、「学のある、完成された弁論家は、列挙されたトポスのリストを捜し出すと、すばやくその上に目を走らせて、問題にふさわしいものを選び出し、そしてそれを普通の言葉で語る」³¹⁾と述べている。

キケロは、『トピカ』の9節から23節でそれぞれのトポスを取り挙げ、簡単な例を示した後、26節から78節で、さらに詳しい説明を加えている。

アリストテレスおよびキケロのトポス論を一通り見終ったので、ここでトポス(特にエンテュメーマのトポス)についてまとめておきたい。トポスとは、種々の日常議論を分析して、その要素や型、すなわち人が議論を進める際の発想のパターンを法則化し、類型化したものである。(それはリストの形をとることが多い。)弁論者は、そのリストによって当面の問題の、どの方向から議論を進めたらよいかを検討することができ、また、他人の議論の進め方や発想のパターンを分析してその議論を解剖し、それに対して有効な反論を加える手掛りを探し出すことができる。

2

コロンビア大学の作文教師であったクラーク(Clark, Donald L.)は、ギリシャ・ローマの修辞学教育を研究した本のなかで、古代のトポス論について触れた後、次のような感想を述べている。

今日の学校や大学において、我々は自分達の作文教授に、(古代の)発見の術(inventio)の伝統を強く必要としている。議論の論点やトポスを取り扱う練習は、古代においてそうであったように、現代でも有益なものでありうるに違いない。³²⁾

クラークが、このような感想を漏らしたちょうど同じ年に、初めてトポスを取り扱ったフレッシュマンイングリッシュの作文教科書が登場した。それがウィーバーの『コンポジション』である。ウィーバーは、序文のなかで、この教科書の特色のひとつとして、議論法を詳しく取りあげたこと、特に説得のトポス("topics" of persuasion)という、今日では全く無視されているものを論じているということを挙げている。³³⁾シカゴ大学での実践経験があるとはいえ、フレッシュマンイングリッシュの教科書にトポスを導入することは、著者自身が"radical innovation"³⁴⁾と述べているように、かなり思い切った試みであったに違いなく、それだけに全国の国語教師に与えた衝撃も大きかったであろう。(この教科書以来、トポスを取り扱った国語教育関係の著書や

論文が続々と現れている。)

『コンポジション』で取り扱われたトポスを検討する前に、ウィーバーのレトリック観、トポス論について簡単に説明しておこう。

ジョハニーセン等によれば、ウィーバーは、彼の修辞学上の見解を理解する上で重要な二つの基本的態度をもっていったという。³⁵⁾ 第一は、彼が政治的に保守主義者であったこと、第二は、プラトンの観念論を信奉していたことであるが、これは、文明批評家・評論家としても著名であった彼の政治上の見解を知るのみならず、修辞学関係の著作を理解する上でも手掛りとなるものである。すなわち、これら二つの態度には、基本原理(原則)や本質の尊重といった、彼の修辞理論の特徴をなす方向性がうかがわれるからである。ウィーバーは、『コンポジション』の序文で、この本で議論法を特に詳しく論じたのは、時代への譲歩であると書いている。³⁶⁾ 何故なら、今日ほど個人に活発な市民としての意識(行動)が要求されている時代はないが、その為には議論の能力、特にプロパガンダに対応する能力が必要とされるからである。プロパガンダに対応する為には、相手の議論を分析することが必要であるが、これについて彼は、ある人間の典型的な議論の型と文体上の特徴は、その人の哲学的態度を知る鍵であり、彼の世界観を照らし出すものであるという持論をもって、「ある人間の議論の方法は、彼の、自らの主義についての明白な公言よりも、その信念の、より一層信実に近い指標となる。」³⁷⁾

実際に、議論の型、すなわちトポスからウィーバーが、どのようにそれを用いる人間のタイプを割り出しているかを見てみよう。ウィーバーは、『言語は説教である』(Language is Sermonic)という、オクラホマ大学大学院での講義をもとにした現代修辞理論の古典ともいわれている論文のなかで、アリストテレス流のトポスを整理して、そのなかから基本的なものとして五つを選択している。そして、先に挙げた二つの態度に基づいて、それぞれに等級をつけている。

①最も高い等級を与えられているのが、類(genus)や定義(definition)からの議論である。これには物の本質よりの議論も含まれる。ウィーバーは、この種の議論を最も好むが、それは彼のプラトン主義によるものであり、また真の保守主義者のしるしである。(と彼は自分で認めている。)

②二番目は、類似(similitude)、類推(analogy)からの議論である。これは、隠喩・ことばのあや・比較・対照などを含む。

③三番目は、原因と結果(cause and effect)あるいは効果・影響からの議論である。この種の議論を好んでおこなうのが、急進派やプラグマティストの特徴である。この議論は、普通、原理や定義された観念への言及を全く欠く。

④最も下位に位置づけられるのが、状況(circumstance)からの議論である。ウィーバーによれば、この議論は最も哲学的でなく、事実を知覚する段階にとどまっている。ものごとに影響されやすい人、特に自由主義者が、特徴的にこの議論を好む。

前の四つが、内部からの議論であるのに対して、外部からの議論をつけ加えることができる。それは、権威(authority)や証言(testimony)による議論である。³⁸⁾

……これらは、少々、一方的で勝手な議論という気もしないではないが、彼の修辞理論(ト

ポス論)を理解する一助となるであろう。ここで、『コンポジション』のトポスの検討に移りたい。

ウィーバーは、『コンポジション』で、アリストテレス流のトポスを整理して、八つのトポスを区別している。そのリストを挙げてみよう。(勿論、これは大学の作文教科書であるから、先程のような、個人的見解に基づくランク付けやレットル張りは、全く見られない。)

- 1 Genus or definition
- 2 Cause and effect
- 3 Circumstance
- 4 Similitude
- 5 Comparison
- 6 Contraries
- 7 Testimony
- 8 Authority

以上のそれぞれについて、ウィーバーがどのような説明を加えているか見ていきたい。

1 Genus or definition (類あるいは定義)

これは物の性質からの議論である。この議論は、固定した類がある場合、その類にとって真理であるものは、その類のすべての要素についても真理であるという原理によるものである。ウィーバーは、この例を奴隷解放を主張したリンカーンの演説のなかから取っている。それを分解して説明してみよう。

「人間」=類

- ①すべて「人間」は「人間」としての属性をもつ。
- ②「黒人」もまた「人間」である。
- ③ゆえに「黒人」は「人間」としての属性をもつ。(そして、自治の権利はその一つである。)

この議論が有効である為には、「類」やその属性が一般に承認された共通のわかりきったものでなければならない。リンカーンの場合は、「人間」と「自治の権利」という、きわめてありふれた類と属性であったので問題はなかったが、これが「自由」や「民主主義」のように、人によって解釈が異なるものになると、この種の議論はきわめて難かしくなる。したがって、そのような類から議論を立てようとするれば、まず、その類を定義することが必要である。多くの議論が定義を含むのはこの為である。

類からの議論も、定義からの議論も、物の性質からの議論という点では同じものであるが、例による議論もこの仲間に入る。何故なら、例は、常にその属する類を示唆しているからである。

2 Cause and effect (原因と結果)

これは因果関係による議論である。例を見てみよう。

- ①浪費は欠乏を生み出す。
- ②これは浪費である。
- ③ゆえにこれは欠乏を生み出すであろう。

この議論の説得力は、我々が大前提に、原因—結果関係を認めるか否かにかかっている。

3 Circumstance (状況)

この種の議論の本質は、我々が日常よく耳にする、「そうするより他に仕方がない」という言葉に十分に集約されている。要するに、ある種の無力さを状況の手に委ねようとするものであり、その意味では物事の本質や原則とのつながりを全く欠いた最も哲学的でない議論である。かつて聞かれたような「今は非常時だ」とか、最近よく耳にする「世界の大勢にならって」とかいうのも、この種の例であろう。

4 Similitude (類似)

この議論は、二つの物事の類似性に関する陳述によるもので、いわゆる「たとえ」による議論である。この議論の説得力は、我々が両者の間に強い類似性を認めるか否か、すなわち、類似点の数と適切さにかかっている。analogy (類推) による議論も、この類に含まれる。

5 Comparison (比較)

これは、ラテンの修辞学では a fortiori と呼ばれるものであり、ある事が起るなら、それより可能性の強い別の事も起るであろうという議論である。すなわち、アリストテレスのエンテュメーマのトポスのなかの、「より多くとより少なくから」(自分の父を殴るような人間なら、隣人だつて殴るだろう。)の議論である。

6 Contraries (反対)

この議論は、例えば、もし我々がある事実や状況から利益を受けているならば、その反対からは不利益を受けるだろうと推論するような議論である(勿論、逆の場合もありうる)。この議論の最も興味深い例は、18世紀の「自然に還れ」運動である。この運動の理論的根拠は、「もし我々の苦しみは、(世の中が)あまりに人工的であることに由来するなら、我々に必要なのは、自然に還るということである」という主張にあった。

7・8 Testimony and Authority (証言と権利)

今までのトポスが内からの議論であったのに対して、これは外からの議論である。これらは特に説明を要しないであろう。この説得力は、証人の信憑性や引いてきた権威の重さにかかっている。

以上の八つのトポスについて説明を加えた後、ウィーバーは読者(生徒)に、実際に議論文に当たってみて、それがどのようなトポスを用いて議論を進めているかを割り出してみるという練習方法を勧めている。そして、見本として、彼自身が、パラグラフごとに主要なトポスを割り出した議論文の例を挙げ、その後練習問題として三つの議論文を載せている。

『コンポジション』のトポス論およびその取り扱いを一通り見終ったところで、気付いた点を三つほど指摘しておこう。

第一に、この教科書では、個々のトポスについてはわかりやすく説明がなされているが、それをどのように使いこなすかという方法については、ほとんど触れられていない。唯一、実際に議論文に当たってその議論の進め方を割り出すという練習方法が述べられているが、トポスについて初めて学んだ生徒が、あのような長い文章のそれぞれのパラグラフから、主要なトポスを首尾

よく見つけ出すことができるだろうか。実際の議論では、一つのパラグラフが一つのトポスによる議論で構成されている例はほとんどなく、大抵はいくつものトポスが複雑にからみあっている。そのなかから、論の構成に最も重要なトポスを探し出すということは、ウィーバーのようなベテラン教師はともかく、初めてこの教科書を手にした生徒や国語教師には、至難の技であろう。キケロは、『雄弁家論』のなかで、それぞれのトポスについて簡単に説明したら、それ以上は、取り扱い方や方法などをくどく述べる必要はない、後は、個人が己れの注意力と洞察力でうまくやっていくであろうという意味のことを語っているが、³⁹⁾ 古代ローマのような弁論社会に生きていない我々には、そのような注意力や洞察力は、どうも期待できそうにない。ウィーバーは、『コンポジション』の4年前に発表した実践報告では、自分の教室で用いた方法を、次のように説明している。まず、生徒にそれぞれのトポスを用いた短い議論を提示して、トポスに対する理解を深めさせ、次にその知識をもとに（最初から意識的に特定のトポスを用いて独立した議論文を書かせるのではなく）、ある主張に対する簡単な支持文や反駁文を書かせてみる。その後は多くのトポスが複雑にからみ合った長い議論文を分析させ、同時に生徒自らにも、今までの知識や技術を練習できるような、かなり長い議論文を書かせてみる。⁴⁰⁾ —これは、ごく簡単な方法であるが、『コンポジション』にもこの程度の説明が記されていれば、大いに読者の役にたったはずである。

第二に、ウィーバーは、例を、それが類（genus）を示唆しているからという理由で、類からの議論の一種として取り扱っている。しかし、実際問題として、例が議論に使われるのは、ある主張をなした後、その根拠として前例（precedent）を挙げるという場合が多い。それならば、例はむしろ testimony の一種として取り扱うのが、より適切ではないだろうか。

第三に、これは前の二つのように不満ではなく、『コンポジション』の卓見とでもいうべきものであるが、ウィーバーがそれぞれのトポスを説明した際、そのいくつかについて論証の説得力を担う部分を指摘している点には有益である。特に他人の議論文を分析する折には大いに役立つ。それに反論を加えたい時は、もっぱらその部分に注目して、そこに疑問を呈すればよいのである。

ウィーバーが、シカゴ大学で、トポスによる議論文指導について同僚と討議していた時、同僚のなかから、トポスという方法は、教師の研究のレベルではもっともらしく見えるが、実際にそれを国語教育に導入したら、かえって現場が混乱するだけだろうという意見が出されたという。⁴¹⁾ 似たようなことは、過去にも主張されてきた。我々は、トポスを学んでそれから議論を行うわけではなく、自と議論の仕方を学んで議論を行ってきているのであるから、トポスなど学ぶ必要はないというのである。これはトポスだけでなく、修辞学全体にもあてはまる議論であろう。古今の修辞学書には、様々な教則が並べられているが、実際にその教則通りに文章を書いて名文家になった人間が何人いただろうか。他ならぬ、修辞学者自身が、これを否定している。

しかし、私の考えでは、すべての教則の価値は、弁論家がそれに従えば雄弁の評判が得られるというものではなく、ある人々が生まれつき雄弁な人々の行っていることに注目し、それを集積したものであるということにある。つまり技術から雄弁が生まれたのではなく、雄弁から技術が生まれたのである。⁴²⁾

ギリシャ・ローマを通じて最大の弁論家の一人であったキケロの言葉である。それでは修辞学の教則は無価値なのだろうか。

古くから文章の修業には三多の法が良いとされてきた。これは唐宋八大家の一人である歐陽修の説いたもので、三多とは、看多（多く文を読む）、做多（多く文を作る）、商量多（多く文について考える）である。波多野完治氏は、文章心理学の立場からこの方法を評価して、その中でも特に重要で欠くことのできないものは商量多であると述べている。⁴³⁾ すなわち、いくら多く文章を読み、書いてもそれについて充分に考えることをしなければ、絶対に文章は上達しないという。文章に上達しようと思えば、人はあらゆる方向からそれを研究してみなければならないというのであるが、その際に、修辞学の知識（教則）が役に立つのではないだろうか。本来、人間が無意識のうちに行っていることを意識的に構成し直した教則は、たとえ直接的には文章を書くのに役立たなくても、文章の分析や研究には大いに有効なはずである。打撃理論通りにバッティングをすれば、ヒットが打てるというものではない。しかし、野球選手が打撃理論を学べば、それは彼にとってプラスとなるであろう。議論文とトポスの関係も同様である。（ちなみに、これを類似のトポスによる議論という。）ウィーバーは、フレッシュマンイングリッシュの時間にトポスを教えてから、生徒の議論文がずっと多彩になったと報告している。⁴⁴⁾

ウィーバーの功績は、トポスという古典修辞学が体系化した技術が、今日の作文教育に十分有効であることを、理論・実践の両面で証明してみせたことにある。多くの国語教師は、作文教育にレトリックの理論が役に立つと思いつつも、古典修辞学をすでに消滅した無益なもののみならず、自分達で新しい修辞学を模索していた。だが、それは前にも述べたようにあまり成功していない。無理もないであろう。いくら熱心に努力しても、短期間で二千年の歴史をもつ古典修辞学に匹敵するものが生み出せる筈がない。それに対してウィーバーは、全く新しい体系を作ろうとせず、古典修辞学を現代風に応用することを試みた。そしてその試みはある程度成功したと思う。トポスの他にも、多くの古典修辞学の遺産が、誰にも手をつけられないまま眠っている。その中には、現代の国語教師を啓発してくれるものも、多いであろう。

〔注〕

- 1) Edward P. J. Corbett : "Rhetoric and Teachers of English" Quarterly Journal of Speech, 1965, 51, pp. 375-381.
- 2) I. A. Richards : Philosophy of Rhetoric, Oxford U.P. (1936) 1979, p. 3.
- 3) Edward P. J. Corbett : "Rhetoric and Teachers", p. 367.
- 4) Cf. カイム・ペレルマン : 説得の論理学, 三輪正訳, 理想社, 昭和55年.
Chaim Perelman : "The New Rhetoric" in eds by Lloyd F. Bitzer and Edwin Black, The Prospect of Rhetoric, Prentice-Hall, 1971, pp. 115-122.
_____ : The New Rhetoric: A Treatise on Argumentation, tr. by John Wilkinson and Purcell Weaver, Univ. of Notre

- Dame Press, (1969) 1971.
-
- 5) Edward P.J. Corbett : "Rhetoric" Encyclopedia Britanica, 15th ed.
6) Richard M. Weaver, etal : "Rhetoric and Teachers" p. 380.
: "Looking for an Argument" College English, 1953,
14, pp. 210-16.
7) Edward P.J. Corbett : "Rhctoric and Teachers" p. 380.
8) Roland Barthes : "L'ancienne Rhétorique ; Aide-Mémoire" Communi-
cation, 16, 1970, p. 202.
9) Aristotle : The "Art" of Rhetoric, tr. by John Henry Freese, Loeb
Classical Library, (1926) 1975, 1357 a.
10) Aristotle : The "Art" of Rhetoric, 1357 a.
11) Aristotle : The "Art" of Rhetoric, 1395 b.
12) Cf. Richard A. Lanham : A Handlist of Rhetorical Terms, Univ. of California
Press, (1968) 1969, p. 41.
George Kennedy : Classical Rhetoric and Its Christian and Secular Tra-
dition from Ancient to Modern Times, Univ. of North
Carolina Press, 1980, p. 84.
13) Aristotle : The "Art" of Rhetoric, 1358 a.
14) Aristotle : The "Art" of Rhetoric, 1392 a — 1393 a.
15) George Kennedy : Classical Rhetoric, pp. 63-64.
16) George Kennedy : Classical Rhetoric, p. 76.

: The Art of Persuasion in Greece, Routledge and Kegan
Paul, 1963, p. 101.
17) Richard Lanham : A Handlist, p. 99.
18) 河野與一 : "古代辯論術" A・シーグフリード著, 河野・河盛訳,
「現代辯論術」附録, 岩波新書, 昭和31年, pp. 167-168.
19) Edward P.J. Corbett : Classical Rhetoric for the Modern Student, Oxford U.P.
(1965) 1971, p. 35.
20) Edward P.J. Corbett : Classical Rhetoric for the Modern Student, pp. 107-145.
21) Roland Barthes : "L'ancienne Rhétorique" pp. 206-210.
22) E. R. クルティウス : ヨーロッパ文学とラテン中世, 南大路振一他訳, みすず書
房, 1971, pp. 96-97.
23) Cf. Peter Dixon : Rhetoric, Methuen & Co. Ltd. (1971) 1977, pp. 27-28.
Richard A. Lanham : A Handlist, pp. 110-111.
24) Kenneth Burke : A Rhetoric of Motives, Univ. of California Press,
(1950) 1969, p. 56.

- 25) Cicero : De Oratore, tr. by E. W. Sutton, Loeb Classical Library, (1942) 1979, II, 162—173.
- 26) Cicero : De Partitione Oratoria, tr. by H. Rackham, Loeb Classical Library, (1942) 1977, ii 5—7.
- 27) Cicero : Topica, tr. by H. W. Hubbell, Loeb Classical Library, (1949) 1968, I, 1—2.
- 28) Cicero : Topica, II, 6—7.
- 29) Cicero : Topica, II, 8.
- 30) Cicero : De Partitione Oratoria, iii. 8.
- 31) Cicero : Orator, tr. by H. M. Hubbell, Loeb Classical Library, (1939) 1971, xiv. 47.
- 32) Donald L. Clark : Rhetoric in Greco-Roman Education, Columbia U.P. (1957) 1959, pp. 78—79.
- 33) Richard M. Weaver : Composition, Holt, Rinehart and Winston, (1957) 1961, forward, iii.
- 34) Richard M. Weaver : Composition, forward, iv.
- 35) Richard L. Johannesen et al. : "Richard M. Weaver on the Nature of Rhetoric ; An Interpretation" in Johannesen ed. Contemporary Theories of Rhetoric ; Selected Readings, Harper & Row, 1971, pp. 182—183.
- 36) Richard M. Weaver : Composition, forward, iii.
- 37) Richard M. Weaver : The Ethics of Rhetoric, Gateway Edition, 1953, p. 58.
- 38) Richard M. Weaver : "Language is Sermonic" in Contemporary Theories of Rhetoric, pp. 168—173.
- Richard L. Johannesen et al. : "Richard M. Weaver" pp. 189—193.
- 39) Cicero : De Oratore, II, 174—175.
- 40) Richard M. Weaver et al. : "Looking for an Argument", p. 215.
- 41) Richard M. Weaver et al. : "Looking for an Argument", p. 215.
- 42) Cicero : De Oratore I, 146.
- 43) 波多野完治 : 文章心理学入門, 新潮文庫, (昭和28年)昭和50年, p. 237.
- 44) Richard M. Weaver et al. : "Looking for an Argument", p. 215.